

教師間で授業や教材研究を連携して行うことがよりいっそう求められる

——中田先生は現役の校長でいらつしやいますが、そのお立場から、完全週5日制の実施に備えて、学校としての体制作りを進めていくうえで今懸念事項となっていると思われることはなんでしょうか。

中田 やはり、土曜日の授業時間が減ったこと、そして必修科目の単位数が38単位から31単位に削減されたこと、いかに対応するかということがですね。これまでも時間割を組むときには各教科間による「マ数のぶんどり合戦」という面がありました。選択授業の枠などを巡って、よりその傾向が強くなる危険性があります。教育課程審議会が公表した教育課程の改善についての答申は、量から質への転換、生徒の主体性を重視する教育を促しています。確かにこの点は評価できますが、「学力をつけるためにはある程度の時間数が

必要」という考え方は絶対に残ると思います。そこで課題になってくるのが「総合的な学習の時間」をどのような内容にするかということなんです。

——といいますか、
中田 「総合的な学習の時間」は生徒が独自にテーマを決めて研究を行う「課題研究」や、自己表現力を養うための「小論文指導」、あるいは総合学科で実施されている「産業社会と人間」のような授業が主流になると思うんです。ただ大学入試のことを考えると、「総合的な学習の時間」を補習にあてるような高校も出てくるかもしれません。

教師間の共同研究がより求められる

——そのような考え方には賛成ですか。
中田 人間形成のための教育ということと考えると、「総合的な学習の時間」は、本来の趣旨にのっとった内容にするべきです。やはりそれぞれの教科はその教科の時間内で、精選された授業をめざす必要が出てきます。しかし、ひたすら効率性を求めるのはいかなものでしょうか。生徒はお互いに学び合つ中で、いろんな考え方を知り、学び意欲を高めていくものです。そのためにはある程度の時間は必要です。

——しかし現実には授業時間は限られていますね。

中田 そうですね。結局教師が、より授業研究を徹底していく以外にないでしょうね。これまでの教師は「一城の主」という意識が強くて、ほかの教師と共同で教材研究や授業研究をやろうという気持ち弱かった。これからは外部の研修会にも積極的に参加するべきでしょうし、学内の同一教科の教師との共同研究も欠かせません。

これは、「自ら学び、考える力」を育てる授業を行うためにも重要です。優秀な教師は昔から、生徒に基礎・基本となる知識を身につけさせ、同時にその知識をどのように応用すればいいのかといったことを、ちゃんと生徒に教えていたはず。問題は、その授業技術が、特定の教師のみにとどまり、広がらなかったということ。だからこそ、研修や共同研究は重要ですね。

校内での新カリキュラムの検討を早急に

——完全週5日制の実施に対応するために、学校全体としてはどのように取り組むつもりですか。
中田 教育課程委員会のようなプロジ

「考える力」を育てる教育へ教師の意識変革が必要

——教育課程審議会の委員を務め、また今年の3月までは東京都立戸山高校の校長をお務めになった和田先生は、完全週5日制のポイントはどこ点だとお考えですか。

和田 大切なのは、今回の改革がただ単に土曜日を休みにする、その分の授業時間を減らすということだけでなく、まっけないという点です。新しい学習指導要領がスタートする2003年以降は、必修科目の単位数が減られ、その代わりに選択科目が増えることになり。また教育内容も削減されることになっていきます。

——教育内容が削減されるとはいつても、全体の授業時間が少なくなり、必修科目の単位数も減るとなると、先生は授業のやりくりに苦労しそうですね。和田 選択科目の授業時間分が「英語は週に5時間は欲しい」「数学もフランス

1時間欲しい」と、各教科の取り合いになってしまいかもれませんね。しかしそれでは、結局従来となにも変わらないことになってしまいます。

——では、これまでとどのように変わらなくてはならないのですか。
和田 完全週5日制にどう対応するかを検討するときに、教課審の教育課程の改善についての答申で提示されているこれからの教育の方針も併せて考えなくてはなりません。答申ではいろいろなねらいが書かれています。私はその中で最も重要なのは、「自ら学び、自ら考える力を育てる教育」だと思います。今までの知識偏重の教育を改め、生徒の考える力を伸ばしていくという考え方がですね。授業自体を「考える力」や「創造性を高める」ものへと変えていくことが必要です。

——しかし、そのためには「考える力」などをいっそう評価できる方向へ大学入試が変わることが求められるのでは。和田 確かにそうです。答申にも、大学入試を変えてほしいと要望を書き込

特集 VIEW SPECIAL

メインから得られるもの



——しかし現実には授業時間は限られていますね。

教師自身の意識変革も不可欠です。各種の研修や教育関係の本など、積極的に活用してほしいですね。また私は

教科書をいかに活用するかがより問われる

——授業時間の減少、教育内容の削減に応じた授業を展開するには、具体的ににはなにが必要になるのでしょうか。
和田 まずは、教科書選びが大切になってきます。新しい教科書は、新学習指導要領による授業が始まる1年以上前には手に入るはずですから、目的に合ったものを選んで、「この教科書を使ってこんな授業をしていくんだ」という書写真を早めに描いた方がいいですね。どの教科書を使うかを決めるのは教師自身ですからね。これは考える力や創造性を高める授業をしていくためにも重要なことです。

教師自身の意識変革も不可欠です。各種の研修や教育関係の本など、積極的に活用してほしいですね。また私は



東京都立王子東高校校長 中田道夫
東京都立南高校、府中高校などを経て、平成8年度より八王子東高校校長。担当教科は物理科。

エクトチームを学校内に作ることになると思っています。その中で、授業時間、必修単位の削減に対応しつつどのようなカリキュラムを構築するか、「総合的な学習の時間」をどうするかといったことを教員間で話し合っていくつもりです。

また、学校の自由度が高まる中で、スクールカラーをどう打ち出すかということもプロジェクトチームで検討しなくてはなりません。今の八王子東高校は、物理、化学、生物をすべて生徒に履修させるなど、多くの科目をまんべんなく勉強するカリキュラムを編成しているのが特徴なんです。だから、自由選択の多い高校とは違い、国立大の受験者がかなり多い。私自身としては、この特色を今後より鮮明にしたいと思っています。まず特色あるカリキュラムを打ち出し、今度はそのカリキュラムを実現するために、教員の確保をしておくことが必要になりますからね。



前東京都立戸山高校校長 和田征士
現在中央教育審議会専門委員、教育課程審議会委員、教育職員養成審議会委員、全国高等学校長協会顧問を務める。

今、教育職員養成審議会の委員も務めているのですが、そこで教師が現場のまま通信制や夜間の大学院に通えるチャンスを増やす案を検討中です。そういう機会を利用することも、先生方がこれからの教育にどう対応するかのヒントになるのではないのでしょうか。

生徒の実態に即したカリキュラム作りを

——各学校で組むカリキュラムも、再検討が必要になりますね。

和田 まず、現在実施している自校のカリキュラムが生徒の実態に即しているか、教師みんなで議論することが必要ですね。生徒に合致したカリキュラムを組めば、生徒のやる気を高めることにつながります。また、その学校ならではの教育方針も生まれてきます。その中で今度は、個々の教師が授業のやり方をどうするか、創意工夫が望まれます。

完全週5日制をにらんだ 授業5日制への取り組みは 教師、授業をどう変えたか

宮崎西高校は、国公立大合格者が例年300名を超える宮崎県内でも有数の進学校である。同校が、文部省の「学校週5日制調査研究協力校」の指定を受けたのは平成4年のこと。これがきっかけとなり同校は他校に先んじて、完全週5日制時代の学校のあり方について模索することになった。

教科指導の改革

指導のポイントを明確化し 教師間で共有

現在、同校では完全週5日制の導入をにらみ、完全授業5日制として出校土曜日にも授業を行わず、全校集会・学年集会、講演会などを行っている。そのため、教える内容の範囲は現行の学習指導要領に基づきながらもかわらず、月～金曜日までの週30時間の中で対応している。そこで求められるのが、限られた時間の中でより密度の高い指導を実現することである。

まず同校が取り組んだのが、「各教科・科目の基礎・基本の確認」。ひと

口に「基礎・基本」といってもその概念は教師1人ひとりによって異なる可能性がある。

そこで宮崎西高校では、各教科会で学習指導要領を軸に教科・科目ごとに基礎・基本事項の定義づけを行い、教師間の共通理解を確かなものにした。そして、さらに学習指導要領と同校の生徒の実態を加味した視点から授業における具体的な達成目標を細かく立てていった。

実際に教師が指導を進めていくうえで、どのような点を工夫・改善するかについてのチェック事項も決められた。下の表は2年生の国語の指導上の工夫・改善事項である。「教材の精選・工夫」「授業の工夫・改善」「個に応じた指導の工夫」「学習遅滞生徒への工夫」「課題の工夫」の五つの観点で具体的な教科指導の取り組みを設定、教師は細かいチェックを行うことになる。

週5日制に伴う指導の工夫・改善の評価
(国語科2年/抜粋)

教材の精選・工夫	<ul style="list-style-type: none"> 論理的思考力を養成していくための評論文などの精選と工夫はなされているか 心理を理解し、情趣を涵養(かんよう)していくための文学作品教材の精選と工夫はなされているか 古典の読解力を養成していくための精選と工夫はなされているか 国語力を養成していくための副教材の精選と工夫はなされているか
授業の工夫・改善	<ul style="list-style-type: none"> 授業の週計画の生徒への提示はなされているか 授業の予習プリントの作成はなされているか 確認テストの実施はなされているか
個に応じた指導の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 弱点補強カードの利用がなされているか 学習反省日誌の利用がなされているか
学習遅滞生徒への工夫	<ul style="list-style-type: none"> 新聞のコラム、社説を利用した指導がなされているか 丁寧な復習プリントの作成がなされているか
課題の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 学習意欲を喚起させ、わかりやすく、国語の3領域が深められる課題の工夫・改善が十分になされているか

指導の工夫・改善のための具体的な取り組みが、すべての教科・科目について挙げられており、それぞれの取り組みが十分なされているかを教師は5段階で自己評価していく。

授業形態のあり方を模索し、意識の共有を図っています。同校でもかつては、授業方法の工夫といったことは、個々の教師に任されている面が強かったという。だが学校全体で密度の高い授業を実現するには教師の連携が欠かせない。そのため同校では現在、各教科会や研修部などが中心となって、共同研究や共同討議を積極的にしている。

教材の精選・工夫

学習ノートを 学校独自で 開発

効率的な授業を実現するために、教材の見直しも図られた。「教科書は週32時間授業を想定して作られていますから、週30時間授業に対応するために、なんらかの工夫が必要になります。そこで教科書の流れに沿って授業をするのではなく、教える順序を変えたり、重要となるポイントを絞り出してそこに時間を割くにはどうすればいいかなどの研究を進めました。また、例えば化学では教科書に沿って自主編集した学習ノートを作り、授業は学習ノートを使いながら展開しています。さらに各単元ごとに身につ

けておかなければいけない基礎・基本事項や達成目標がありますので、家庭学習用の課題はそれに基づいて作成しています。(治田先生)

教科書の選定についても、徹底的に比較したうえで決めている。毎年教務課が中心となって、適当と思われる教科書を3社分選り出し、さらにそれを比較したあとに1社に絞り込むという形を採っている。

学習遅滞生徒への対応

補習 小テストを 頻繁に実施

効率的な授業を進めていくということとは、反面、授業についていけない生徒を増やす危険性ははらんでいる。同校では、学習に遅れがちな生徒への補習指導にも力を入れている。進路指導部長の佐藤幸美先生はこう語る。

「各学期の期末テストの前に、学習に遅れがちな生徒を対象とした補習週

これら基礎・基本の確認、達成目標の決定、指導の工夫・改善に取り組むことで、教師は指導のねらい、方法、ポイントを的確にとらえたうえで生徒に接することができるだけでなく、宮崎西高校における基礎・基本の概念を教師間で共有化することができるようになった。なお、授業の進度についても「年間指導計画」として立てられており、各教科・科目の教師はそれぞれ

やすく授業を進めている。

共同研究に 積極的に取り組み 授業法を追究

また、重要なのが教師1人ひとりの授業技術を高めていくということ。完全週5日制時代には、効率的な授業ばかりではなく、生徒の自主性や思考力を伸ばす授業を展開することがさらに求められてくる。教務部教務主任の治田壯六先生は次のように語る。

「各教科ごとに、最低1学期に1回は研究授業を実施しています。ほかの教師がグループ討論や実験などを取り入れたある教師の授業を見学します。研究授業には、原則としてその教科の教師は全員出席することになっていま

間を設けています。補習週間は、通常の50分授業を45分の短縮授業とし、残った時間を彼らのための補習授業にあてています。生徒は、各教科の教師から指名を受けると補習を受けにいかなくてはなりません。そして期末テストが終わったあとには基礎・基本週間を設置。その学期の中で学んできたことの総復習期間にあてています。」

そのほかにも、終礼前に小テストを毎日実施。1日1科目10分のテストで、基礎・基本の定着を図っている。

学校行事と土曜日の利用法

活発な行事で 学校の活性化を 図る

完全週5日制が実施されると、授業を優先させて、学校行事を減らす高校が増えることも予想されるが、宮崎西高校では逆の考え方で臨んでいる。

「学校行事を減らしてしまっただけ、ゆとりの中で生徒の生きる力を伸ばす

という完全週5日制の目的にそぐわなくなってしまう。本校の場合、授業の効率化によってむしろ学校行事には以前より力を入れることができるようになっていきます。体育祭、クラスマッチ、マラソン大会、駅伝大会などは、いずれも平日の授業時間を割いて行っています。卒業式の答辞で、生徒が一番話題にするのが学校行事のことで、学校を活性化するためにも、やはり行事は外せません。」(研修部主任・後藤康浩先生)

学校行事の一つに、同校では現在、休日である第4土曜日にボランティア活動を取り入れている。参加・不参加は生徒の自由。福祉施設での活動や校内の環境美化などに従事することになる。「土曜日が休みになったからといって、学校は生徒に対してなにもしないというのはおかしいと思います。いきなり自由を与えられても、土曜日をどのように有意義に過ごせばいいかわからない生徒も、きつと多いはず。そこで教師が道しるべを作ってあげる必要があります。一度道しるべがでぎ上がってしまえば、今度は生徒同士が先輩から後輩へと受け継いでいけばいい。生徒が主体的に規律を持って過ごすためには、教師の側も周到な準備をしないといけませんね。」(佐藤先生)

特集 VIEW SPECIAL

メインから 得られる もの



教育課程審議会の答申の概要

今回の答申でまず注目したいのが、教育内容の大幅な削減である。これは「ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図る」というねらいに基づくものだ。高校の各教科の削減内容については答申では触れられていないが、学習指導要領の告示時（今年度中の予定）に明らかにする。

授業時間数は、完全週5日制の実施に伴う減少を考慮して、卒業に必要な総単位数が、現行の80単位から74単位

になる。そして必修単位数も現行の普通科最低38単位、専門・総合学科最低35単位から各31単位に減る。

一方で、新たな必修の教科として小学校3年以上に「総合的な学習の時間」、高校に「情報」が設置されることも、今回の答申で注目すべき点である。

「総合的な学習の時間」とは、生徒が主体的に設定したテーマを自分で調べ、考え、発表することで知識・技能の深化を図ったり、自分の生き方や将来の職業について模索するなど、教科

の枠組みを越えた横断的な授業を展開する場として定められている。これにより、生徒が「自ら学び、自ら考える力を育むこと」が期待されている。

「総合的な学習の時間」の具体的な内容については、各学校の創意工夫に委ねられている。

また「情報」は、情報化社会の進展を背景に新設された教科。コンピュータ

教育課程審議会から出された答申の概要をまとめ、さらにそこから浮かび上がるこれからの学校のあり方を審議会委員に聞いた。

1タのしくみや、情報処理技術、情報化時代の社会のあり方などについて教えることになる。

今回発表された新課程の標準単位数

教科	科目	単位数	教科	科目	単位数
国語	国語表現	2	理科	生物	3
	国語表現	2		地学	3
	国語総合	4	地学	3	
	現代文	4	保健体育	体育	7-8
	古典	4		保健	2
地理歴史	音楽	2	芸術	音楽	2
	世界史A	2		音楽	2
	世界史B	2		音楽	2
	日本史A	2		美術	2
	日本史B	2		美術	2
	地理A	2		美術	2
	地理B	2		工業	2
	現代社会	2		工業	2
	倫理	2		書道	2
	政治・経済	2		書道	2
数学	数学基礎	2	外国語	書道	2
	数学	3		オーストラリア語	2
	数学	4		オーストラリア語	4
	数学A	3		英語	3
	数学B	2		英語	4
理科	数学C	2	家庭情報	リーディングライティング	4
	理科基礎	2		ライティング	4
	理科総合A	2		家庭基礎	2
	理科総合B	2		家庭総合	4
	物理	3		生活技術	4
公民	物理	3	情報	情報A	2
	化学	3		情報B	2
	生物	3		情報C	2

「総合的な学習の時間」の単位数は3ないし6単位。

山極隆・教育課程審議会委員が語る

学校の主体性 自立性を高め 特色ある教育を進める

教育課程審議会の答申では、教育課程の改善の基本的ねらいとして、次の四つが掲げられています。

豊かな人間性や社会性 国際社会に

の実態に対応して、多くの教科をびつびつ教える高校や、逆に選択科目を増やす高校があってもいいはずなのに、似たり寄ったりのカリキュラムになりがちだった。そこで各校の主体性・自立性をもっと強めようというわけです。

教育委員会と学校の関係については、今度の中央教育審議会の答申で抜本的な改革案が示される予定です。また、これまで公立校には人事権と予算権がほとんどありませんでしたが、特色ある学校作りを進めるためにも、ある程度は人事、予算に関する発言権を強める方向へと進んでいくと思います。

教師の力量を問う 「総合的な学習の時間」

学校が主体性・自立性を獲得するということは、それだけ自校の教育に対して責任を負わなくてはいけなくなるということでもあります。「総合的な学習の時間」をどのように展開するかなどは、まさに学校や教師の力量を問われる試金石といえるでしょう。従来の教科では、教師は教科書に沿って教えればそれで安心という面がありました。しかし「総合的な学習の時間」は教科書がないわけですから、どんな内容にするか学校はきちんとした書写真

生きる日本人としての自覚を育成する

自ら学び、自ら考える力を育成する ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実する

各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校作りを進める

この中で、これまでにはなかった新を描けなくてはならないし、教師は日々の授業の中でいっそう創意工夫を求められることになりす。

ポイントになるのは、教科を越えた教師間の連携の必要性がより高まるということ。「総合的な学習の時間」は横断的な教科ですからね。授業技術を向上させるために、相互に授業を批評し合うような関係を築いてもらいたいですね。また、学校内の教師の連携にとどまらず、保護者や地域の人たちの協力も不可欠になると思います。

「自ら学び、自ら考える」生徒を育てるには、「総合的な学習の時間」だけでなく、国語や数学といった従来の教科の授業での工夫も大事です。ところが残念なことに、例えば理科の教科書を調べると、実験や観察が豊富に盛り込まれたものよりも、知識偏重型の教科書の方が人気が高い傾向があります。実験や観察を積み重ねることで生徒は科学的思考の大切さやおもしろさを発見するはずなのに……。でも、そろそろ発想を転換するときです。これから

しい考え方が、の「特色ある教育、特色ある学校作り」なんです。これは教育課程の大まかな基準は学習指導要領などで国が定めるが、実際の授業編成はできる限り各学校の工夫に任せようという考え方で。

これまでの日本の教育は、国が作った決まりごとに、ややもするとさらにの授業は、なにをどれだけ教えるかだけでなく、必要な知識は基礎・基本として身につけさせ、なおかつその知識を応用できる能力をどう身につけさせるかが重要になるのです。

変わりつつある入試に 対応するためにも 意識変革を

「自ら学び、自ら考える力を育成する教育」については、その考え方に基本的には賛同しながらも、「大学入試が変わらない限り、高校教育も知識偏重から脱却できないのではないか」といった方をする人がいます。教課審の答申に対するマスコミ各社の論調も似たような感じでした。

しかし私は、大学入試は知識偏重から総合的な理解力、思考力を問うものへと確実に変化していると思います。小論文や総合問題を課す大学が増えてくるのはその典型です。また学科試験でも、知識と知識を論理的に組み合わせないと答えが導き出せないものが数

教育委員会が細かい規制を作って、学校にそれを守らせていました。学校は教育委員会からの「指導・助言」についてさえも、そのまま従わなくてはならないような雰囲気があった。しかしそれでは学校は身動きがとれず、個々の生徒の実態に即した教育、指導ができなくなってしまう。例えば生徒



教育課程審議会委員 山極隆 都立高校教諭、文部省教科調査官、主任視学官などを経て、現在富山大教育学部教授、中教審専門委員

多く出題されています。確かに一部の私立大入試に関しては、断片的な知識のみを問う問題が多いのも事実です。改善していくべき課題といえるでしょう。大学審議会でもなんらかの方針が示されることになると思います。また、「総合的な学習の時間」での生徒の成果、つまり授業の中で作成した研究論文や作品などを、入試でも評価していくしくみを作ること必要でしょう。

これからは「自ら学び、自ら考える力」こそが、大学入試でもいっそう求められる時代になると思っんです。そういった力を育成するために、授業では体験的活動や推論、分析、討論などに時間を割くことになるでしょう。教師の力をより発揮できる時代になるのです。

先生の意見、お待ちしております。

編集部では今月の特集について先生方からの意見・反論・悩みなどをお待ちしております。巻末書簡、またはメールで編集部までお寄せください。 Eメール: view21@mail.benesse.co.jp

VIEW SPECIAL 特集

メインから 得られるもの

